

基礎研自由大学院大阪第三学科での歩み、その成果と課題

高田好章（大阪第三学科）

基礎研に集うひとつのゼミとして38年余りの長い歩みが続いている大阪第三学科（金融・流通・協同組合論ゼミ）の活動をこの機会に振り返り、その成果と課題をまとめることとにしました。昨年10月17日に行われた基礎研現代資本主義研究会がこの共通セッションのプレシンポとして開催され、その際私は「働きつつ学ぶ」というこれまで私自身の歩みを報告いたしました。この度の報告では、私が開講後の1年あまりあとに参加し現在も所属する当ゼミの歩みを報告することにいたします。なお、これまでも次のように数度にわたり当ゼミの報告をしています：

・高田好章執筆

「投稿 基礎研運動と私 働きながら研究交流できる場として」

『経済科学通信』臨時増刊 25周年記念号 1993年6月

「基礎研だより 金融流通協同組合論学科（大阪）〔大阪第3学科〕の紹介」

『経済科学通信』No. 90 1999年7月

「働きつつ学ぶ権利と「基礎経済科学研究所自由大学院」の経験」自由大学院（旧称：夜間通信研究科）に参加して考えたこと『経済学教育』No19 2000年4月 経済学教育学会  
「『格差社会の構造』を通過点として一大阪第三学科で学んで一」

勤労・実践を捉えかえす学び（14）『経済科学通信』118号 2008年12月

「基礎研と共に“働きつつ学ぶ”ことを実践して」『経済科学通信』123号 2010年9月

・小野満さん執筆（執筆者は当ゼミ唯一の第1回から現在までの参加者です）

「『ゼミナール』の大切さと楽しさ」

勤労・実践を捉えかえす学び（7）『経済科学通信』110号 2006年6月

今回の報告では、上記報告を踏まえ、その後の成果と課題を加えて綴ることとします。

当ゼミは、1977年10月20日に第1回ゼミを開催し、2002年には開講25周年を乗り越え、2005年11月30日に第500回ゼミを数えて、今年2016年の1月27日には第717回ゼミを終えたところです。ゼミの開催場所はゼミ名にあるように大阪市の中心部、開催日は月2回、開講当初は一週間の仕事が終わる週末の土曜日に行っていましたが、週5日制が中小企業にも広まった1990年ごろには週日に変わり、その3年後には第2・4水曜日に定着してきています。ゼミで取り上げるテキストは、月前半は現代物、月後半は古典というかつての基礎研夜間通信研究科の設立当初からの学科開催形態を踏襲している唯一のゼミで、ゼミ名に「学科」と入る所以となっています。なお、当初は京都と大阪の2つの第三学科があったのですが、いつしか大阪だけになっています。テキスト以外に、時には参加する方から個人研究報告があり、特にゼミによる出版の執筆時期には構想・原稿の発表の場となっています。当初から合宿を度々おこなっていて、出版時期は特に多く合宿を行いました。また最近では春・秋に景勝地へのハイキングが恒例行事となっています。

当ゼミには当初から様々な職種の仕事に付いている人々が集い、多いときは10名、通常5～8名が毎回参加し、ゼミ参加20年から30年以上の人たちから最近入られた人まで様々な人たちで報告・討論を行っています。これまでは幾人ももの大学院生が参加され巣立っていかれました

が、主要なメンバーは労働現場で働き、また働いてきた人たちであって、専門職研究者ではなく、労働者研究者という人たちです。ゼミ指導には、当初から現在まで森岡孝二先生が担当していただいておりますが、1995年ごろから森岡先生が忙しくなり、開講20年目を迎えるところ、経験あるゼミの参加者で十分ゼミ討論などの運営できるとの森岡先生の助言もあり、それ以降のゼミは通例ゼミ参加者のみが集まり活発に議論しています。ゼミで取り上げてきたテキストは以下のとおりです。

- ・ 古典：レーニン『帝国主義論』、ヒルファーディング『金融資本論』、マルクス『経済学批判要綱』および『資本論第』第1～3巻（現在3周回目の途上です）：詳細は以下のとおり

『金融資本論』：1977年11月3日～1978年11月18日

『帝国主義論』：1978年12月16日～1979年4月28日

『資本論』3巻：1979年11月1日～1982年5月8日

『帝国主義論』：1982年11月6日～1983年6月4日

『資本論』3巻：1983年12月3日～1985年3月9日

『資本論』2巻：1985年4月20日～1987年3月14日

『資本論』1巻：1987年4月18日～1990年9月28日

『金融資本論』：1990年11月16日～1993年7月7日

『経済学批判要綱』：1993年12月1日～1997年5月28日

『金融資本論』：1997年9月24日～1999年11月24日

『資本論』2巻：2000年2月23日～2002年5月22日

『資本論』3巻：2002年6月26日～2008年3月26日

『資本論』1巻：2008年4月23日～2012年4月25日

『資本論』2巻：2012年5月23日～2016年1月27日 ※現在、第20章11節を終了

- ・ 現代物：

- ・ 開講当初のテキスト：島恭彦『インフレーション』、山田喜志夫『現代インフレーション論』、野村秀和『現代の企業分析』、谷田庄三『現代日本の銀行資本』など

- ・ 最近のテキスト：高田太久吉『マルクス経済学と金融化論』、鶴田満彦『21世紀日本の経済と社会』、若森章孝『新自由主義・国家・フレキシキュリティの最前線ーグローバル化時代の政治経済学』、姉齒暁『豊かさという幻想ー「消費社会」批判』、デヴィッド・ハーヴェイ『資本の〈謎〉世界金融恐慌と21世紀資本主義』、有井行夫『株式会社の正当性と所有理論』、村岡俊三『グローバリゼーションをマルクスの目で読み解く』、涌井秀行『戦後日本資本主義の根本問題』、D. ハーヴェイ『新自由主義』、大谷禎之介編『21世紀のマルクス 資本システム批判の方法と理論』、二宮厚美『ジェンダー平等の経済学』

38年余りのゼミ活動の中で、森岡先生の強い働きかけと熱意ある指導によって、これまでにゼミ参加者を中心に執筆した本を5冊出版しています。

森岡孝二編『勤労者の日本経済論ー構造転換と中小企業』法律文化社 1986年

森岡孝二編著『現代日本の企業と社会ー人権ルールの確立をめざして』法律文化社 1994年

大阪第三学科開講25周年記念『変化のなかの企業と社会』基礎経済科学研究所 2003年

森岡孝二編著『格差社会の構造ーグローバル資本主義の断層』桜井書店 2007年

森岡孝二編『貧困社会ニッポンの断層』桜井書店 2012年

これらの本をもう一度眺めてみますと、その時代の経済情勢を反映した本となるだけでなく、執筆したゼミ参加者がその当時どのような問題に対応し、どのように考えていたのかが如実に表れています。さらに、当ゼミがこれまで長く続けてきた要因をも知ることができます。ゼミでテキストを読みあつて単に勉強し学習することだけではなく、自らの勉強していることをゼミで発表し、さらに論文を執筆することによって、お互いにそれぞれの学びたい・知りたい・書きたい方向と目標を知り合うことが出来ます。さらにそこから集団学習のこれら目標が出てきます。さらなる集団学習と参加者との目標が近づくことで、ゼミへの求心力が高まり推進力が加速していきます。それが次第にひとつのテーマにまとまってくれば、ゼミで本を出版できる体制が徐々に出来上がってきます。このような流れの中で、上記の本を執筆・出版できました。

一般的に、ゼミに参加することの意義は、参加者の勉強範囲外の事をゼミで知ることができることです。つまり、他の参加者の学習したことや経験を聞くこと、ある問題で議論をすることで、自らの論理を検証し高めることが出来るだけでなく、これまでに知らなかった論文や文献・論争を知ることができ、また学界の現在の流れ・新たな流れを知ることが出来ます。ゼミはいわば勉強することに関する情報の窓口でもあります。一般的にというのは、たとえば通常の大学でのゼミであればこれらのことは当然ありうることです。しかし、労働現場で働く人たちが集う当ゼミでは、基礎研が掲げる「働きつつ学ぶ」をそのまま踏襲する人たちが集まっていることから、それぞれが働いて得た現場感覚に基づいて発言し、発表して、議論を得たのち、執筆しています。自らが所属する業界だけでなく、まったく情勢が異なる他の業界を知ることができることによって、それぞれが考えることが井の中の蛙にならずに、日本の経済・世界の経済と働く現場とを広く深く見据えた形で考え学習し発表し、執筆してできたのが、これらの本なのです。

それでは、このようになぜ当ゼミが長年続くことが出来たのか、という問いに対して明確に答えることがとても難しいことです。いくつかの思いつくことを挙げてみます。まずもって、もっとも大切なことは、ゼミ参加者の熱意です。「働きつつ学ぶ」ということに対する熱意がいつもゼミで議論をして感じる事が出来ます。いつでしたか、おそらくゼミが始まって10年目か15年目ぐらいだったころだと記憶していますが、私が会場にあわてて着くと一人だけ待っていてくれて、そんな二人だけの時が2度ほどありましたが、それでも続けてきました。20年以上にわたり毎月2度の水曜日の夜に集まる事が日常生活の中に溶け込んで、集まるのが普通、という時間の流れが自然とそれぞれの生活の中に出来上がってきたことも、多くの人たちが集まる要因と思われます。何よりも先ほど挙げたゼミへの参加者の求心力が大きく、続けていく推進力になっていることは確かです。さらにゼミのテキストの取り上げ方にも長く続けていける要因が見えてきます。それはかつての夜間通信研究科の開催形態を踏襲してきたことにあります。具体的には、毎月古典と現代物を交互に読んでいくという形です。特に古典に『資本論』を取り上げ、全3巻を読み終えるのに約7年から9年もの期間を掛けて、その時々の経済情勢が変わる中で、もう一度同じ箇所を読んだときに前とは違う形でとらえられるという、何度読んでも新鮮な議論が古典ではできるということに、参加者が粘り強く長く参加し続けてきた要因があります。さらに、古典だけではなく現代物を毎月テキストとして読んでいることにも参加を促す要因があります。今何が起り、それに対して世の中の識者がどのように理解し論じているのかを知る、ということは、とても勉強している人を引き付けます。取り上げる現代物のテキストはゼミ参加者が推薦しあつて議論の末、次のテキストに取り上げます。常に新しい学説を学べる場所として、

当ゼミの役割の一つになっていて、求心力になっています。さらに、なかなか一人では読み通せない本をゼミなどで取り上げれば、何とか最後まで読むことができる、という経験は誰にもあります。これが特に古典にイえることであり、また現代物でも同様のものがあります。当然、古典と現代物を同時にゼミ参加者が読んでいることによって、知らず知らずのうちに、古典と現代との融合が頭の中で出来上がってきます。その意味でも労働の現場意識と上向してできた論理がつながっていくということになります。ここに基礎研が50年近く前に夜間通信研究科を設立し、そのゼミの開催形態を考え出した先見性が光り輝き、我々のゼミの前途を照らして歩んできたのです。設立当初に奮闘された方々に思いの一端でも叶えられた、と信じています。

さらに、これまでの長い時間の中で常にゼミの門戸を開きました。基礎研に集う人やそれ以外の新しい人が順々にゼミに参加され、新たな風がゼミに吹くことによっても、推進力を再び得ることが出来ました。このように開講当初から参加されている人々だけでなく、その道の途中から参加された人々もいつしかゼミの顔と呼べるようになってきています。またゼミ参加者の中には、当ゼミを母艦として飛び立ち、基礎研の他のゼミや外部の様々な研究会に参加され他流試合の末、ひるがえって新たな種を母艦に着艦してもたらず方々が多くおられます。

長く続けてこられた重要な要因のひとつにゼミ事務局の役割があります。開講当初からゼミ便りをゼミ事務局が毎回発行しています。最初のゼミ事務局を担われた西田達昭さんから仲野組子さんを経て、19年前の1997年4月からは今も私がゼミ事務局を担っています。西田さん時代は手紙、仲野さんの時代にハガキに変わり、私もそれを踏襲してハガキで毎回のゼミ前に届くように開催日の前週金曜日付でゼミ便りをゼミ参加者に届けています。前回ゼミの報告と討論の要約・お知らせ・次回以降の予定をところ狭しと7ポイントという、少し高齢の方々には優しくない文字の大きさですが、紙面いっぱい収まるように書いています。ゼミ便りを月2回書いて届けるのは、当事者にはとても大変なのですが、手前味噌ですがこれがゼミを続けていけるひとつだと自負しています。報告・討論の要約はまた書く方にとってもとても勉強になります。さらにこのゼミ便りをゼミの門戸開放のひとつとして基礎研所内MLに投稿して、基礎研の皆様にも活動を知っていただくとともに、私自身のホームページに大阪第三学科のサイトを作り、当ゼミの存在と活動を多くの人に知っていただく手段としても機能しています。

当ゼミが700回目の時に、参加者で記念写真を撮りましたが、その際はからずも1000回まで、との声が出ました。1000回目まであと何年？ 私を含め参加者が職を退いていきつつある、という事は避けようもありません。しかしながら、ゼミは新たな人を迎えることによって、次の歩みを進めることができます。巷では社会人大学院がこれからも発展していくでしょう。しかしながら、これらの社会人大学院とは違って、「働きながら学ぶ」の人々、さらに「働き終わっても学ぶ」の人たちも含めて、基礎研のゼミにはずっと在籍することができるゼミで、学ぶ場として存在し続けることが出来るのです。時代を先取りした基礎研の夜間通信研究科ということも言えますが、逆にそれを乗り越える基礎研のゼミの在り方の一つの姿を、私たち大阪第三学科が示しています。私たちのゼミだけでなく、基礎研の様々なゼミや研究会がこれからも存在し続けて、「働きつつ学ぶ」場として重要な位置を占めていくことを、これからも願っています。